

題点であったが、芸術教育上の理想と官立学校としての制約が対立し、のちのちまでも十分な解決は得られなかった。六については、本年度年報「生徒」の項に記されているように、撰科生を漸次減らすという措置がとられた。

③ 制服に関する追加規定

内規に属する制服規定に関し、「自明治四十四年一月教務内規、諸規定書類」に左の記録がある。

庶第一三八號

生徒服制相定度儀ニ付上申

本校生徒ノ服制ハ去三十一年八月十五日付ヲ以テ御認可相成居候
処右ハ冬服ノミノ儀ニ有之候ニ付今般夏服及外套ノ服制別紙ノ通
リ相定メ儀式ノ時ハ勿論平常ニ在テモ登校ノ節ハ必ス着用スル事
ニ致度此段至急仰高裁候也

明治三十三年七月六日

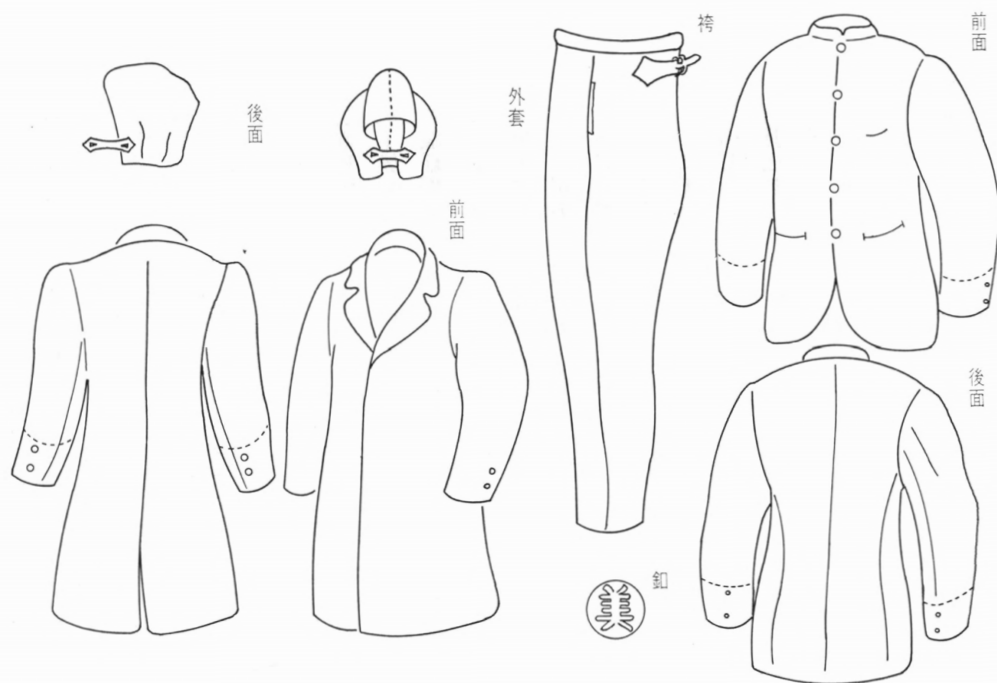
東京美術学校長久保田鼎〔印〕

文部大臣伯爵樺山資紀殿

この申請は同年同月二十四日に認可された。

④ 大村西崖の活躍

大村西崖は本書第一巻ですでに述べたように、岡倉覚三校長と意見が対立して助教授の職を辞した。しかし、美術学校騒動直後に新



制服（上記「庶第138号」別紙）

校長高嶺秀夫によって再び起用され、彫刻科嘱託教員兼教務・庶務掛主任のポストを与えられて改革期の学校運営に参画し、その一方では反岡倉派の立場に立った美術批評家として活躍した。次に掲げる記事はその活躍ぶりをよく示している。

○大村西崖君の消息 久しく本誌編輯に従事ありし〔京都市美術工芸学校〕京都美術學校の教諭大村西崖君は職を辭して東京へ歸られたる後、専ら筆研に従事せられて繁忙なるよしは竊かに聞く處なるか、今度「金子」靜枝君との往復に依りて其消息を得たり、目下頗る忙雜の境に處せらるゝ由にて其僑寓は下谷根岸之金杉千七十三番地なり



大村西崖

華帖拜誦仕候 筆硯不相變御清壯毎々協會雜誌にて色々拜見學問上大分御餘澤に浴し居り候 小生義も去る三十年岡倉〔寛三〕氏と主義不合之爲に不和を生じて學校を去り候てより直に美術評論を發刊し廿號までは殆ど全冊執筆仕り異主義に對し論難攻撃を事と致し候ひしかど昨年來少々くたびれ候間吉岡と申すものに廿一號以後を譲り爾來専ら修養を事といたし候 兼て發題仕候佛敎圖像法研究も一と先小成仕り爾後佛敎の哲學部面を探り候後一二年來西洋審美學西洋美術史の研究に耽り目下

西洋神傳取調印度のと比較講究罷在し 彼の美術學校大紛擾後高嶺「秀夫」に招かれてまた學校に入り而後教務庶務相つとめそれすら大分の劇職に候を博物館鑑査部彫刻科主任に古社寺保存計畫調査員をかね昨年〔四月任命〕七月以來慶應義塾大學部美術史講座并美術學校の西洋考古學及東洋美術史受持等相つとめ居候まゝ誠に寸暇も無之其間にはまた洋畫手引草審美總飡など編述仕り尙孜々研鑽の途に有之候間御地協會雜誌寄稿之義も乍念疎濶に打すぎ失禮仕候 過日三田慶應義塾にて演述致し候佛敎中の審美編同塾學報に出候筈に付其内差上候間御轉載被下候も不苦候 尙本年は「目さまし草」と申候雜誌之爲に希臘羅馬諸神傳〔是は佛敎關係の日本美術史に於ける如く西洋古美術品解釋に必要なもの候〕及審美小史相したゝめ本月より同雜誌に出し申候間御一覽之上御採用被下候ても宜しく候 右諸神傳及東洋美術史は學校にて毎週二時間幻燈を用ひて講義致候間本年夏休など右幻燈を携へ一度御地へ参りて未知の諸人のために講演仕度とも存し候 此義或は可然とも御思召被下候はゞ御幹旋願はしく候 御勤めに依りては美學概要及西洋美術史等單簡に講し候ても無用ならざるべしと存し候〔中略〕

一月七日夜

西崖

金子先生侍讀

『京都美術協會雜誌』第九十二号。明治三十三年二月

学校運営への参画という点については、彼は自著『密教發達志』(大正七年。図本叢刊会)の「自敘」に

「高嶺秀夫代爲^二校長^一。予爲^二其所^一聘。戊戌春。再奉^二職於學校^一。幹^二教務^一。講^二美術史・神話等^一。彫刻科教授法如^二今日^一者。乃係^二予所^一施設^二也^一。」

と記し、彫刻科教授法、つまり、従来の木彫中心主義を排し、塑造を大幅に導入し、長沼守敬を聘して塑造科を設置し、写生を基本とする新しい彫刻科教授法を定めたのが自分であることを表明している。また、この「自敘」とは別に「西崖自敘伝（原漢文）」と題する資料（息子大村文夫が上記「自敘」をもとに他の記録を参照して編集したと考えられる和文大村西崖伝草稿。大村家蔵）が残っており、それには上記の文に続けて

「今に至りて爲めに木彫の衰微を致せることを悔ゆ。洋畫の一教室を新設して淺井忠、小坂象堂に薦めてその教官と爲し、岩村透に薦めて西洋美術史を講ぜしむ。」

と記されている。何から引用したものか不明だが、もしも事実だとすれば、これは西崖が彫刻科以外の人事改革問題にも指導性を發揮したことを意味する。

研究、教育の面では仏教図像法、仏教哲学を研究した後、西洋審美学、西洋美術史を研究し、明治三十二年六月には森鷗外との共編『審美綱領』を出版。翌七月から鷗外の後任として慶応義塾の美学講義を一年間担当した。同年十月からはバリ万国博に出張した久米桂一郎の代わりに本校の西洋考古学授業（上記書簡から希臘羅馬諸神伝

を講じたことがわかる。西崖は明治四十五年に至り『希臘羅馬諸神伝』を出版し、同三十四年九月までこれが続け、また、同三十三年一月から今泉雄作の後任として東洋美術史授業も担当した。同年五月には教務・庶務掛主任を辞している。さらに、同三十四年九月からは瀧精一の後任として美学授業も担当した。

西崖の美学講義の内容は、現存する二種類の自筆講義録によって把握することができる。一つは慶応義塾におけるもので、これは第一講分を欠き、第二講（三十二年六月二十六日）から第三十六講（三十三年二月七日）の分までの講義録であり、もう一つは本校におけるもので、こちらは「美学講録」という標題と「明治三十四年於東京美術学校開講」という記入がある。この二つを合せると『審美綱領』ひいては鷗外の美学講義（本書第一巻参照）の範囲をほぼ覆うことになる。本校の講義ではこの二つの講義録を合せ用いたのであろう。したがって、西崖の美学講義は『審美綱領』に極めて近い内容のものであったといえるが、「美学講録」の緒言に記されているように、彼は自分が最も広大且つ完全な理論であると信ずるハルトマン美学に多くを取りながら、かれこれ取捨し、創見を加え、主として芸術の実際上の問題について講述したのであった。用語や、インドの五明論など東洋哲学による説明などの箇所にも創見の一端が窺われる。西崖は「小泉八雲氏の『日本絵画論』に就て」（明治三十年八月『読売新聞』連載。八雲の日本画称賛論を美学的見地から徹底的に批判した論説）のなかで、「また日本に限らず、美術全體の理論も、佛教といふ名に統べられたる東洋哲學に依りて大に詮^{あきらか}むることを得べし。君に勤む。少しく大藏の論部を緝^{ひもと}け。萬法性相の精微は、

君をして豁然として眞理を證得することを得せしめむ。」と言っているように、美学論構築上仏教哲学に学ぶところが多かった。彼が最もよく用いた無記菴という筆名も「美術ハもと印度哲學に所謂無記業に屬するものにて、由來善惡の境に隔せず。」(上記論説)というときの「無記」に由来している。世間には「大村ハルトマン」などと揶揄する者もあったが(明治三十二年八月三十日『報知新聞』、決してハルトマン美学一辺倒だったわけではない。美術学校在校中に森鷗外の『しがらみ草紙』におけるハルトマン美学の紹介とそれに立脚した文芸批評に刺激されてハルトマン美学に興味を抱き、千朶山房を隔月訪れて鷗外の教えを受け(明治二十五年七月以降)、あるいは鷗外に慶応義塾における美学講義の草稿を借りて勉強し(同年九月)、ハルトマン美学の決定的影響を受けながら、一方で研究を続けていた仏教哲学の理論とそれを融合させ、独自の美学論を構築しようとしたというのが西崖の美学研究の筋道であった。

なお、西崖の美学講義における原語の表記は鷗外の場合と同じく英語である。鷗外は勿論ドイツ語の原典を読み、恐らく英語版も参考にし、生徒に理解し易いように英語表記を用いたと考えられるが、西崖は、英語は子供の頃に一、二年習ったものの、ドイツ語を学んだ形跡はなく、したがってドイツ語の原典を読んでいたとは思われず、恐らく英語版によって研究したと考えられる。また、彼の美学論の骨子は『美術評論』に「自然美」「形式美」「美の受用」(以上第十五号。明治三十一年十月二十七日)、「美を成さざる境」「美を成す境」(以上第十六号。同年十一月二十五日)、「美の成立」(第十七号。同三十二年一月九日)として掲載されている。

西崖は明治三十五年十月に嘱託から教授に昇格し、同時に東洋美術史料取調べを命ぜられ、東洋美術史の研究と教育に専念する。以後、昭和二年に死去するまでの間に『支那美術史彫塑篇』(大正四年。仏書刊行会図像部)、『東洋美術史』(同十四年。図本叢刊会)の名著をはじめとする膨大な著述を残し、東洋美術史学の発展に貢献した。大正九年には『密教發達志』(前出)によって帝国学士院賞も授与されており、その学問的功績は東京帝国大学の瀧精一に優るとも劣らないといわれる。それらの点については矢代幸雄著「忘れ得ぬ人々、その一、大村西崖」(『大和文華』第十四号。昭和二十九年六月)や谷信一著「美術・美術史回想雜記(二)——瀧精一・大村西崖のこ」と(『萌春』第三百十五・三百二十一号。昭和五十六年十二月・五十七年六月)に紹介がなされている。本校の講義に関する西崖の著作には次のものがある。

①『東洋美術小史』明治三十八年四月本校予備科授業用参考書として百五十部印行。

②『東洋美術小史』明治三十九年四月審美書院より発行。①の改訂版。序文正木直彦、平子鐸嶺。

③『支那絵画小史』『日本絵画小史』明治四十三年七月審美書院より発行。前者は『東洋美術大観』の支那画部附載のものに校訂を加えたもの。序文徳富猪一郎。後者は明治三十九年本校発行『日本名画百選』の解説「日本絵画の沿革略」を同じく本校発行の『国民画鑑』に改稿掲載し、さらに単行本として発行したものの。序文森林太郎。両書とも授業用としても用いた様子がある。

④『東洋美術史』（既出）研究成果をもとに一層詳細に記述したものの。なお、本書に図版を加えたものが大村西崖、田辺孝次共撰として昭和八年に平凡社から発行され、同二十五年に風間書房がそれを再版した。

⑤『支那絵画史大系』大村西崖校輯。大正十四年十月本校校友会より発行。凡例によると本校東洋絵画史教科用として編集したもので、歴代名画記、図画見聞誌、画継の三冊の合綴（漢文）である。西崖は本書をもとに大正十四年十月から約半年ばかり本校内外の有志を対象とする課外講義（火曜日）も行なっている。

以上は西崖の本校教師という職務を中心としてみた場合の活動であるが、前出金子静枝宛書簡に明らかのように、西崖は美術批評家としても顕著な活動をした。この点については庄司淳一著「美術と自然・大村西崖の『自然』思想」（『日本の美学』第十号。昭和六十二年五月）、吉田千鶴子著「大村西崖の美術批評」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十六号。平成三年三月）等の研究があるが、要するに西崖は京都市美術工芸学校教諭時代に「彫塑ノ美術界ニ於ケル地位」（『京都美術協会雑誌』第十七号。明治二十六年十月）を発表したのを発端として新聞や雑誌に美術に関する論説を寄稿し始め、特に明治三十一年から同三十五年教授昇格までの間は、反岡倉寛三派の美術批評家として筆を揮い、美術界に大きな影響を与えたのであった。その評論は上述の美学理論を土台とし、自然主義を提唱してそれを彫刻、日本画の制作領域にも浸透させようとした点に特色があった。彼は无声会、彫塑会の発足を促し、明治三十三年春に両会が第一回展を開いて以来、極めて好意的な批評を書き、その一方で同じく三十

三年春から顕著になった日本美術院の横山大観、菱田春草らの無線描法による彩色日本画の試みを「朦朧体」「漂渺体」と呼んで激しく非難し、そのため、大観らの作風は一般に「朦朧体」と呼ばれるようになった。西崖の評論は展覧会批評に限らず美術に関するさまざまな問題に亘っており、執筆量は膨大であった。彼は『美術評論』（明治三十年十一月創刊）の第一号から第二十号まで主筆をつとめ、これに岳南、無記菴の筆名あるいは無署名で執筆を続けたが、その一方で、本名及び無記菴、局外生、△△生（寺山星川と共著）、無名子、書記生、海士などの筆名で新聞や雑誌に執筆を続けた。

⑤ 楠公銅像の完成

皇居前広場の楠公（楠正成）銅像は第一巻第二節に記したとおり、明治二十三年に本校に対して製作依頼がなされ、本校の依頼製作事業の第一号となったものであるが、同二十六年に木型が完成し、天覧に供したのち、岡崎雪声が本校内の鋳造場でこれを鋳造し、同二十九年九月に完成（同三十四年五月十二日『民声新報』所載住友吉左衛門手記「楠公銅像の記」による）。以後校内に置かれていた。同三十二年五月より宮内省の経費をもって石台の建設が始まり、翌三十三年四月にはほぼ落成したので同月十七日に銅像を本校から運び出し、同月三十日に現場に到着。運搬の様子を当時の新聞が次のように伝えている。

○楠公の銅像 兼て美術學校にて鑄製中なりし大阪住友家より宮内省へ獻納すべき楠公の銅像は今回落成^を告^げを去る十七日美術學